

## 書評と紹介

石河康国著

### 『向坂逸郎評伝

——上巻1897～1950／下巻1951～1985』



評者：鈴木 裕子

#### はじめに

本書は、戦前マルクス主義の研究に心血を注ぎ、労農派の論客として勇名を馳せ、敗戦後は特に三井三池の労働組合などの労働運動に深く関わり、社会主義運動に積極的に参加、主導した向坂逸郎(1897～1985年)氏についての評伝である。東大卒業後、助手になり、1922年ドイツに留学し、マルクの価値が下がったマルクス・エンゲルスなどの社会主義文献を渉猟し、稀難本も多く集めた。のち自宅の庭に堅固なコンクリートの書庫を建築し、それらを収蔵した。敗戦後は、社会主義の先輩山川均や、東大教授大内兵衛などと社会主義協会を起し、機関雑誌『社会主義』を刊行、一方、九州大学教授として復帰し、東京中野の鷺宮の自宅や福岡、三池炭鉱などで学習会を組織し、社会主義の理論や実践活動などについて多くの弟子を育て、マルクス主義研究者としての実績も大きい。

私事にわたるが、評者は、向坂氏が師と仰ぐ山川均の妻である山川菊栄の選集全10巻別巻1巻を編集・解題執筆(岩波書店から1981～82年刊行)することになり、向坂邸を訪問、老先

生とゆき夫人に拝眉の機会を得た。

向坂書庫には、故堺利彦旧蔵の社会主義の冊子類、また大逆事件で絞殺された堺の親友幸徳秋水、管野須賀子の書簡類、第一次共産党事件の被告(被害者)からの書簡類が含まれ、まさに日本社会主義運動の宝庫と思われた。老先生はわたくしがお会いした時はもうすっかり好々爺となっておられたが、機智に富むウイットや、ちょっと皮肉めいた物言いで、ユーモアにお話しされた。そばでゆき夫人が口添えされ、そのお話も滋味に富んだものであった。

最初のときは、岩波書店の編集者であった竹田行之氏が一緒に連れて行ってくださった。向坂書庫には、先生在世中もしばしば出向いたが、厳寒のなか、書庫までとほとほと来られ、眼を細めながら、わたくしたちの作業を見守ってくださったことが懐かしく偲ばれる。冬季でも火気は厳禁であった。古今東西の第一級の書物・資料が眠り、なかには世界でも一つか二つくらいしかないというものも含まれており、その保存に細心の注意を払われていたのであろう。

先生死後、著者石河氏との向坂邸訪問は続き、ゆき夫人のユーモア溢れるお話を聞き、ときに邸内に住む和気誠・文子夫妻も同席され、話は先生や山川夫妻へと及んだ。向坂ゆきさんは102歳まで長寿を保ち、その死後は、向坂夫妻が収集・保管したすべての蔵書類(書簡を除く)が法政大学大原社会問題研究所に寄贈された。自宅の敷地もすべて法政大に寄贈され、そこにはいま留学生会館が建てられているという。ちなみに向坂文庫の目録は和気誠氏によって編集され、大原社会問題研究所から刊行されている。

## 生い立ちとドイツ留学・社会主義文献収集、 嶺ゆきとの結婚

本書の意義は、向坂氏の社会主義・マルクス主義についての理論と行動について多くの著書・論文・書簡・訊問調書等の資料類を駆使し、大変分かりやすくその実像に迫っていることである。ここでは紙幅も限られており、理論面での活躍は控え、主にその人物像を中心にしていきたい。向坂氏が亡くなられたのは1985年、以後33年も経過しており、今ではその名も知らぬ人びとが多いかと思われる。まず本書上下巻の章名を掲げる。大凡の内容が知れる。

はじめに——「資本論」の探求と変革への意志／第一章 晩年の若木／第二章 野に放たれた虎／第三章 ファシズムと対峙／第四章 日本資本主義論争／第五章 獄中と戦時下をしのぐ／第六章 戦後戦略論議と「資本論」三昧／第七章 『前進』と『経済学方法論』のころ／第八章 左派社会党とともに／第九章 スターリン批判をはさんで／第十章 六〇年三池闘争前後／第十一章 構造改革論争、『マルクス伝』／第十二章 社会主義協会の発展／第十三章 最後の奮闘／第十四章 最晩年

本書には、目次に見られるように向坂逸郎その人の理論研究とともに実践運動、その人物像、周囲の人びとの姿が活写されている。下巻巻末には「主要論文初出と再録一覧」・年譜・人名索引が付され、詳細な年譜には、執筆文・著書等も記載されており、一方ならぬ著者の熱意が伝わってくる。

向坂は、1897年2月6日、福岡県大牟田に生まれた。祖父向坂多中は三池藩の下級武士の漢学者で、維新後、呉服商、養豚、果樹などを手掛け、進取の気性に富んでいた。祖母シケは三池藩の御殿女中。父賀録は小学校卒業後、働きに出、逸郎出生時は三井物産大牟田支店に勤務。母コハル（旧姓石橋）は柳川藩の下級武士

の娘。兄弟姉妹は逸郎を長子として4女5男。母は大家族の重荷を一手に引き受けた。逸郎は祖母シケのスパルタ教育のゆえか小学校高等科から成績が上がり、八女中学校から第五高等学校を経て東京帝国大学に入学。この間父は三井を辞め、耐火粘土の事業を始めるが、次第に傾き、書画・骨董・家財を売っては凌ぐ生活が続く。五高時代は専ら読書と散歩三昧、授業ではドイツ語教師に傾倒、のちマルクス主義の文献に親しむ素地がこの頃から培われていった。

父の事業は益々傾き、シケの指示で父の弟松岡叔父に学資援助を受け、河上肇の『貧乏物語』を夢中で読み、経済学科へ進んだ。東京帝大助手となり、やがて文部省から支給された金でドイツ留学を果たす。ドイツでは専ら勉学に励むとともに、貴重なドイツ語の社会主義文献を収集。ドイツに渡る前、嶺ゆきと婚約。ゆきの母は女学校の教師であった。父は成城中学の英語教師で、彼女は東京府立第二女学校（竹早高校）を卒業したばかりであった。ちなみに山川菊栄も、前記の竹田氏の母君も同校の出身。弟妹の多い向坂氏をゆきさんが大きく支えたと思われる。死後の蔵書、残される土地・家屋などの処置も見事なものであった。

向坂は、メーリングの『マルクス伝』を熟読、後年、自身も『マルクス伝』を著した。ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』なども読んだが「機械的な論理の欠陥」があるとして評価しなかったが、彼女の革命家としての真摯な生き方には感銘を受けたようである。留学中の2年半、ゆきとの夥しい書簡のやり取りがあった。婚約してすぐ2年半という長い別離に、向坂はフィアンセにはちよっぴり強がりと言教めいた言葉を並べながらも後年の「亭主閑白」振りからは窺えない愛おしさを隠し切れぬ向坂と、おっかな吃驚で付き合い始めたが次第にうちとけていくゆきとの様子が書簡から読み取れる。

帰国後の1925年6月、嶺ゆきと結婚、九州帝国大学助教授、翌年、教授に就任。28年、赤化教授として辞任させられるまで、旺盛な経済学とマルクス主義研究・教育者としての生活が始まる。辞任後、東京に移住、生涯、師と仰ぐ山川均と対面。労農派マルクス主義の『労農』同人となる。専門研究と同時に一般誌紙にも盛んに寄稿し始める。

### マルクス主義研究の第一線で奮闘、 戦時下の身の処し方

九大では、ゼミは「金融資本論」。マルクス・エンゲルス研究に本格的に着手。1928年辞職後、東京に住居を移し、まず改造社の『経済学全集』の編纂に協力。『マルクス＝エンゲルス全集』に『剰余価値学説史』第1巻訳出、『経済学全集』に『資本論大系』上下巻、この間、櫛田民蔵、猪俣津南雄、高田保馬、河上肇らと地代論について論議・論争を重ね、1933年『地代論研究』を上梓。定職を失った向坂は一般誌紙にも盛んに寄稿、「櫛田民蔵論」などの人物評論、時評的な文章を多数発表。同時に『労農』同人として労農派マルクス主義の論客になる。日中全面戦争勃発の1937年まで『レーニン伝』『マルクス＝エンゲルス全集』別巻、『統制経済論総観』『日本資本主義の諸問題』などを著す。37年12月、人民戦線事件で逮捕、39年5月の保釈まで留置場、拘置所に拘禁。保釈後、山川均に倣い、農耕を営む傍ら、ラッセル『ドイツ』『アジア民族誌』訳出、フライターク『独逸文化史』第1巻訳出。戦時中は、樋口一葉、北村透谷、幸田露伴などを読んだらしい。高野長英については大きな関心を持ち、敗戦翌年の1946年『科学の道——高野長英のこと』を上梓。敗戦は向坂にとっては「必至の出来事」「やっと敗けた」というのが率直な感懐であった。向坂は「戦争末期にいわゆる特攻隊というもの」

を「知ったとき」に「私はその事実であることを疑った。我国の未来を担う若い人々の生命をこのように軽く取扱っていいものかどうかを疑った」「私を訪ねてくれたある将校にこのような話をしたところが、彼は笑って、飛行機の数より人間の方が沢山にありますからねと答えた」（「いのちを軽んずる思想」1946年）。いかに天皇制軍部や天皇制国家が天皇の「赤子」といいながら「臣民」＝「国民」の命を粗末に見ていたか、端的に窺われるというものである。

### 社会主義協会と三池闘争

1947年岩波文庫として『資本論』第1分冊刊行（1952年第11分冊刊行で完結）、戦後は、晩年に至るまでほぼ毎年、単行書を出版、専門書のほか『道を拓いた人々』『歴史をつくるもの』『若き僚友の死』『三池日記』『うめ草すて石』『わが生涯の闘い』『教育と教師』『歴史・人生・書物——向坂逸郎対談集』『歴史から学ぶ』『右傾化に抗して』『愚者の道』『向坂逸郎・向坂ゆき——叛骨の昭和史』、死去する前年には『人生は面白い』がある。このほか、経済学書も多数上梓したほか、1960年に九大を定年退職するまでの学生の育成、三池労組などとの労組運動・学習活動への関与、社会主義協会での多方面にわたる活躍があった。

敗戦の年の11月日本社会党が結党されるが、発起人の一人賀川豊彦は「皇室の存在は少しも動揺せずに永続せらるる必要がある」（1945年11月）と述べ、事実、社会党内には「君民同治」論者も存した。それに対し山川、向坂らは、賀川らの天皇制尊崇には当然のことながら違和感を持ち、社会党への参加を見合わせ、旧労農派の再結集に向け、47年8月、『前進』を発刊、この間山川提唱の民主人民連盟の組織づくりに奔走するが、これは挫折。『前進』は、平和革命論を軸とした戦後労農派の再結集、のちの左派

社会党形成の理論的な推進力として重要な役割を果たす。向坂は非武装中立、憲法9条を擁護し、長年苦労を共にしてきた荒畑寒村、小堀甚二、対馬忠行らと袂を分かつことになる。「知識人や宗教家の間に、強い平和擁護のための運動が成長している」「広汎な生活の利害によって結合された大衆を把握しない限り、熱烈なようであっても、脆弱性をもつのはまぬかれない」「組織された労働者階級は「平和の最後の保障となることができる」（「人心の変化について」1951年9月）と主張。「全面講和」運動では「平和4原則」（非武装、中立、反基地、日米安保条約反対）を打ち出した社会党を支持、以後、社会党左派の成長に心を砕く。同年、社会主義協会が社会主義研究会の後身として結成、機関雑誌『社会主義』を発刊。同誌52年1・2月号に発表した「日共の『新綱領』批判」では、「天皇制がなおわが国の民主化の上に大きな障碍となっている」「天皇の憲法上の地位について改正を必要とする部分がある」と述べる一方、天皇制は「権力や暴力によって排撃することの出来るものではなく、巧妙で我慢強い啓蒙運動によるほかない」と、日本人大衆に刷り込まれている天皇尊崇の精神的重みを考慮し、粘り強く啓発運動をおこなうほかない、と説いている。朝鮮戦争特需によって急速に息を吹き返しつづであった日本独占資本主義は、対米従属と戦争の旨味を忘れられず軍事産業に利潤を求め、沖縄を切り捨てた欺瞞的な「独立」を利用し、民族主義的な政治統合を図ろうとした。向坂は次のように指摘する。「国民的苦悩を『特需』によって、また『独立』の空語によってまひさせたがる者が多い」「思想がただ思想である限り、恐るべき力はない」「ただ国民の多数を掴むとき力となる」（「思想と政治」『思想』52年1月号）と、知識と実践の重要性を説く。

この二つが見事に実現したのは、1960年の

三井三池闘争であった。敗戦直後から向坂が一番仲良くなったのは、三井鉦山の三池炭鉦の労働者であった。最初につながったのはのちに三鉦連事務局長、三池労組書記長、炭労事務局長などを歴任し、三池闘争をはじめとする炭労最盛期の諸闘争の指導部になる灰原茂雄であった。九大では学生の指導に当たり、研究会を組織、三池では灰原ら労働者の「資本論」学習会（向坂教室）の講師となり、のち育てた学者の卵たちをも講師として送り、相互学習に意を注いだものであろう。理論と実践の相互乗り入れともいうべきであろうか。

1960年2月に九大を定年退職した後は、三池労組の闘いに全力をもって支えた。当時、三池労組本所支部長であった塚元敦義は、「向坂は労働運動を指導するのか」という記者の質問に次のように答えている。「学者は労働運動の具体的な動きは知らぬ。だから学者が具体的な指示や指導をすることはありえない」「労働運動は大衆運動なのだから、学者の行き過ぎがあれば、運動は曲がったものになってゆく。向坂教授に行き過ぎがあれば、教室が十年も続くはずがない」（『週刊朝日』1959年11月1日号）。

三池闘争の激闘のなかで、向坂は、三池労組から呼ばれれば万難を排して出かけた。無期限ストライキ突入前夜の臨時大会（12月9日）では挨拶し、のち灰原から「先生のお話がどんなにみんなを勇気づけたか、一寸想像もつかないようです」と手紙で礼をいわれた。

向坂は九大の若手の学究を動員して「日刊社会主義」という謄写版刷りの日刊新聞を発行。1960年4月17日から200日にわたり発行、学究自身がピケ中の組合員に配り歩いた。その創刊号に、向坂は「私はせつせと三池に足を運ぶ。何の足しにもならない老いたる者。ピケをいっしょに張る体力もない者、そんな男が、三池に来て何になるのか、としばしば自問する」「三

池に行きたくなるから行くのである。ただかいがいしく活動している人々の中にいるのがたのしいのである」「翌日の新聞を見ていると、また行きたくなる。まるで恋人の所にでもいくようだと人は笑う」。

向坂氏は、労働者が好きなのであろう。真面目に自らの仕事やなすべき任務を遂行している人を愛しているのであろう。マルクス主義者として一頭地を抜きんじていながら、自らに背かない他者に満腔の同感を覚えるのであろうと、評者は思う。

最後に向坂氏畢生の著書に『マルクス伝』(1962年刊行)がある。この大著について、大内兵衛は激賞、また共産党有数の文献通の理論家であった石堂清倫(61年離党)も「わかい感動をおぼえましたので突然お便り申し上げます」と述べ、『日本読書新聞』に「私は一週間かかってこの新著を二度読み返し、たくさんのこ

とを教えられた。はじめてわかったこともあって大いに満足した」と付け加えている。実は、評者は、石堂氏が主宰されていた運動史研究会に所属し、氏の訶咳に接し、薫陶を受けた。党派が違うとはいえ、同じマルクス主義者の二人の先生がこうしてつながっていたことを、この石河氏の著書から知りえたことも大いに嬉しく思った次第である。

著者には、このほか『労農派マルクス主義上・下巻』社会評論社(2008年)、『マルクスを日本で育てた人—評伝・山川均 I・II』社会評論社(2014, 15年)がある。併読されれば日本の労農派について多くの知見が得られる。

(石河康国著『向坂逸郎評伝—上巻 1897～1950』『向坂逸郎評伝—下巻 1951～1985』社会評論社, 2018年1月/3月, 430頁/386頁, 定価4,000円+税/4,000円+税)

(すずき・ゆうこ 女性史研究者, 山川菊栄研究者)


〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel.03-3265-6811  
<http://www.yuhaku.co.jp/>  
(表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。)
◎図書目録登録◎

<p><b>女性学・男性学 第3版</b> 予価 一九〇〇円 (四六判)</p> <p>伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子著◎ジェンダー論入門 恋愛、労働、育児など、さまざまな生活の場面に焦点を当てた本文と、マンガ、特別講義、コラムやエクササイズなど、工夫をこらした構成で日本の現状に鋭く迫る最新版。自分たちの性とそのあり方を問い直していく入門書。</p>	<p><b>はじめての社会保障</b> 予価 一八〇〇円 (有斐閣アルファ)</p> <p>椋野美智子・田中耕太郎著 信頼できる最新情報と、叙述のわかりやすさが好評のロングセラー・テキスト。2018年制度改正に完全対応。</p>	<p><b>雇用システム論</b> 二五〇〇円 (A5判)</p> <p>佐口和郎著 会社に雇われ、働いた報酬で生活を営む—ICTの展開で雇用の枠外の仕事方が現実になりつつある今、日本の雇用を概説することで、このメカニズムがいかに実現され、変容しつつあるかを示す。</p>	<p><b>生活保護と貧困対策</b> 一八〇〇円 (有斐閣アルファ)</p> <p>岩永理恵・卯月由佳・木下武徳著◎その可能性と未来を拓く 貧困や生活保護をめぐるさまざまな誤解を解きほぐし、よりよい制度・社会の構築へと議論をつなげる。他国と比較しながら考える視点等を提示する。</p>
<p><b>最低生活保障の実証分析</b> 二九〇〇円 (A5判)</p> <p>山田篤裕・駒村康平・四方理人・田中聡一郎・丸山 桂著◎生活保護制度の課題と将来構想 生活保護制度を中心とする日本の最低生活保障の現状と政策変更の影響を、独自の調査を含む大規模データに基づき分析。</p>	<p><b>戦後社会保障の証言</b> 五六〇〇円 (A5判)</p> <p>菅沼隆一・土田武史・岩永理恵・田中聡一郎編◎厚生官僚120時間オパールヒストリー 社会保障制度の成立と展開に関する重要なトピックについて、厚生省の官僚にインタビューを行い、その証言を取録・解説。</p>	<p><b>福祉原理解</b> 三二〇〇円 (四六判)</p> <p>岩崎晋也著◎社会はなぜ他者を援助する仕組みを作ってきたのか「地縁」や「血縁」など特定の「関係のない他者」を援助する仕組みである「福祉」。その正当化の論理を、三つの局面に焦点を当て、壮大なスケールで描く。</p>	